

P-445 術後にみられる臀部褥瘡についての検討

東邦大佐倉病院

木下俊彦, 矢野ともね, 榊谷法生, 大高 究, 伊藤元博

【目的】産婦人科手術後の合併症として、患者臀部の皮膚に紅斑と硬結を認めた報告が散見される。疼痛を伴うことがあり、術後患者にとって重大な合併症であるが、その実態は不明である。そこで、術後の皮膚障害発症の頻度や発症に関与すると思われる因子を調査し、実態を明らかにすることを目的に検討した。

【方法】婦人科および産科の術後患者226名を対象に、手術室退室時、病室帰室時、および術後1日から退院日まで臀部を観察した。皮膚障害は national pressure ulcer advisory panel の分類に基づき、I度：紅斑のみ、II度：皮下組織には至らない皮膚の部分欠損か水疱、硬結がみられる、III度：皮膚の全層欠損、に分類した。調査項目として年齢、身長、体重、麻酔時間、麻酔法、術式、術後のヘモグロビン値、アルブミン値を検討した。

【成績】1)I度が14例に、II度が4例にみられ発生率は8.0%であった。III度はみられなかった。仙骨部ではなく臀部の片側に偏って発生する。圧痛を伴う多彩な形の紅斑と硬結、水疱を特徴としており、pressure sore の所見に一致した。2)手術室退室時や病室帰室時に認められた例はなく、全て術後1~2日目に認めた。16例(88.9%)は7日目までに消失したが、2例(11.1%)は治癒に2ヶ月を要した。3)術中、術後の持続硬膜外麻酔併用例に多く発症したが、脊椎麻酔のみでも発症した。仰臥位、碎石位ともにみられた。発症と体格や血液検査との間に関連性はなかった。

【結論】臀部皮膚障害は臨床所見から急性褥瘡と判断された。今回の検討からは発生に関与する因子は不明であったが、今後、術後に急性褥瘡が発生することを認識し、管理する必要性がある。

★P-446 内分泌攪乱物質による2種の Estrogen receptor-subtype (α, β) 遺伝子の発現調節についての real time PCR による解析

東海大

村野孝代, 和泉俊一郎, Haque Shanta F., 奥脇伸二, 貴家 剛, 鈴木隆弘, 松林秀彦, 牧野恒久

【目的】一部の内分泌攪乱物質(ED)は、Estrogen receptor(ER)を介し、Estrogen様細胞増殖効果を持つ。ERは様々な遺伝子の発現調節を担っているが、EDとERとの親和性は一様ではなく、そのため制御される遺伝子の転写への影響について様々な相違が報告されている。さらに、EstrogenによるERの発現調節がその間に介入することも想定される。そこで我々はヒト乳癌細胞(MCF-7)を用い、EDによる2種のER-subtype(α, β 遺伝子)の発現への作用力価について、real time PCRを行い定量解析し、m-RNAの経時的変化と共に評価した。

【方法】MCF-7細胞を検査用メディウム(chacoal-dextran 処理済み10%FCS含有DMEM)にて培養(37°C, 5%CO₂)し、サブコンフルエントの状態にて披検物質を加えた。披検物質と濃度は、17 β -estradiol (10¹⁰, 10⁹, 10⁸ mol/l), Bisphenol A (10⁶, 10⁵ mol/l), Diethylhexylphthalate:DEHP (10⁶, 10⁵ mol/l), Genistein (10⁸, 10⁷, 10⁶ mol/l)で、物質投与後、3, 6, 10, 24時間後に、細胞から採取したtotal RNAをcDNAに逆転写した。それぞれのサンプルについて、ER α, β および β -actine(内部標準)への特異的 primer と taqman probe を用い、real time PCR (ABI 7700)を行った。

【成績】17 β -estradiol, および内分泌攪乱物質を加えた細胞で、6時間後をピークにER α, β /m-RNAの発現量が有意な増加を認めた。 α/β 比も各物質間で、有意差が認められた。

【結論】内分泌攪乱物質は、細胞中のER α, β 遺伝子の転写調節に影響を及ぼし、その結果、細胞のEstrogen感受性を変化させる可能性が示唆された。

P-447 腹膜中皮細胞表面ジペプチジルペプチダーゼIV(CD26)のサイトカインによる発現調節

名古屋大

岡本早苗, 梶山広明, 鈴木崇弘, 柴田清住, 井篁一彦, 吉川史隆, 水谷栄彦

【目的】ジペプチジルペプチダーゼIV(CD26)は細胞表面アミノペプチダーゼで、様々な生理活性ペプチドを基質に持ち、癌化や癌の進展に関与するとの報告がある。また卵巣癌の腹水中には多様なサイトカインが存在し、癌細胞と腹膜中皮との間の相互作用において一役を担い、癌の進展に影響している。前回我々は、腹膜中皮の卵巣癌腹水による発現増強について報告した。今回は腹水中に多いとされるサイトカインによるCD26の発現調節について検討した。

【方法】腹膜中皮細胞株LP9を用いて、そのCD26活性を調べ、免疫細胞染色にて局在を確認した。サイトカインとして各種濃度のIL-1b, TGF-b, TNF-a, IFN-gを培養上清に添加しCD26の発現変化をウエスタンブロット法、酵素活性で確認した。

【成績】(1)LP9は他の細胞表面アミノペプチダーゼに比較してCD26を高発現していた。(2)CD26の発現はIL-1bの添加で濃度依存性に増強し、1.0ng/mlの添加で蛋白レベルで5.0倍に、酵素活性は1.4倍に増強した。(3)1.0ng/ml以上のTNF-aの添加により濃度依存性に増強した。(4)TGF-bは1.0pg/mlの添加で1.3倍に発現増強した後、濃度依存性に減少し10ng/mlの添加でコントロールの0.5倍まで減少した。

【結論】腹膜中皮は高レベルのCD26活性を有し、その発現は卵巣癌腹水中に存在する各種サイトカインによって発現調節を受けていることを示した。CD26は腹水中の様々なサイトカインを介する中皮と腫瘍細胞との相互作用に影響を及ぼしている可能性が示唆された。